



地平の果てまでずっと荒野が続いていた。

黒くくすんだ大地に動く影はなく、真円を描く巨大な月から降り注ぐ淡い光も、その淀み（よど）を消し去るには足りていない。

さながら世界が終わった後のような光景。所々に散見される何かしらの建造物の成れの果てが、かつてこの場に人がいた事を僅（わず）かに思わせる。

しかし、それだけだった。

荒野を吹き抜ける風は砂埃を上げるばかりで、今のこの場にはおよそ生命というものが感じられない。

崩れるばかりの廢墟（はいきよ）^{はいきよ}。墓標のように突き立てられた十字架。草木の一本も生えておらず、蔦（つた）の代わりに打ち捨てられた鎖が力無くそれらに巻き付いている。

「……………」

そんな全てが色を失ったような陰鬱（いんうつ）^{いんうつ}な風景を、ただじっと見つめる視線があった。

少女だ。

街路樹さながらに立ち並ぶ、柱だけを残した廢墟の先。岩山が風雨に削られて出来上がったような、一見すれば城にも見えるその上で、少女はただ無感動に、ただ無感情に、荒廢した世

界へと青い双眸そうぼうを向けている。

左右に結わえた深い蒼あおの髪、そして首もとで止めただけの上着が、俄にわかに吹き荒れた風に巻き上げられてもその表情は微動だにしない。寒々しさを感じさせる風景の中、果たして少女が何を求めているのか、その瞳に何を映しているのかを読み取る事は出来ず、ただ雪のように白い肌を曇らせる汚れだけが、彼女が随分ずいぶんと長い間に留まっていた事を窺うかがわせた。

「……………」

不意に、少女が小さく口を開いた。

そこから言葉が発せられる事はなかったが、代わりに何かに応えるように一つ、息を吐く。その横顔は変わらず無表情。しかし遙はるか彼方に投げられていた視線は引き戻され、青い瞳が一際強ひととく、凜りんと輝いた。

すると、まるでそれを見越していたかのように、背後から確かな足音が少女の耳に届く。少女にはその正体が解っているのか、すぐ後ろにまで迫っても振り返ろうとはせず、一度瞼まぶたを伏せると、改めて地平の果てまで広がる荒野を見た。

黒くくすんだ大地。真円を描く巨大な月。どこからか、廃墟はいきよの崩れる音が風に乗って響いてくる。

色さえも失った世界の中で、ゆっくりと振り返った少女の青い瞳は、自分のそれとよく似た赤い輝きを映していた。

一章 再開

教室の窓際の後ろから三番目。十分に当たりと言えるであろうその場所から、黒衣マトは右手のシャーペンを動かす事も忘れて、ぼんやりと空を眺めていた。

ペンキで塗り潰したような、一面の青。雲も鳥も飛行機も見えない空はいやに平面的で、見続けていると遠近感が失われそうになる。

手を伸ばせば届きそうな程に近い、どこか作り物めいた空。もしかすると今見えているのは本当に青色を塗っただけの板きれか何かで、裏側に回ればまた別の世界があるのではないかと、そんな事をとりとめのない思考の端で思う。

別の世界。

彼女の世界。

こことは違う世界があつて、そこには一人の女の子がいて、彼女はずっと独りぼっちで荒野の中に佇んでいる——そんな話をしたところで、笑われるのが関の山か。

それでも、とマトは思う。

たった一度だけの邂逅。

それはとても不思議な体験で、およそ現実味に欠けた経験で。振り返ってみれば僅かな間、交わした言葉も数える程だった彼女との出会いは、全部が夢だと言われても納得してしまいそ

うになる。

「夢……」

空の向こう側を見るように投げかけていた視線をつい、と教室の中に向ける。

四時限目も残すところ十分程となった教室は、昼休みを前にした空腹と初夏の暑さで、誰もがすっかりと蕩けてしまっていた。

三年生の夏、通常であればそろそろ高校の事なども考えて、受験に向けた緊張感のようなものも出てくるのかもしれない。しかし付属校だからか、或いは元からそういう校風なのか。少なくともマトたちのクラスにそのようなものはなく、同じように教師もまたその点について何かを言うつもりはないようで、特に注意をしたりする事もなかった。

「……?」

と、不意に視線を感じてマトが右へと首を向ける。

板書を通ける教師の背中を通り越して、クラスメイトたちの背中も過ぎて、ほとんど真横を向いたところで、ようやく視線の正体を特定する事が出来た。

特定したというよりは、目が合った。ぼつちりと。

——どうかした?

口には出さず、目だけでそう尋ねてきたのは、隣の席の小鳥遊ヨミだった。

マトにとつて掛け替えのない相手。そして何よりも、あの「彼女の世界」が真実である事を、

或いはマト以上によく知っている——そんな一番の親友ともいえる存在だ。

——なんでもないよ。

思わず漏れそうになった声を抑えて、マトが苦笑いでヨミの視線に応える。

教室の中に怠惰な空気が蔓延まんえんしているとはいえ、今がまだ授業中である事に違いはない。いくら先生が多少の怠けを見過ごしたとしても、私語となればそうもいかないだろう。

それが伝わったのか、ヨミもくすりと笑みを零して、マトから視線を外した。

暑さと空腹で授業どころではない生徒が大半を占める中で、それでもヨミは真っ直ぐ前を向いている。今し方黒板に書いた内容を説明する先生の声を聞きながら、ノートに走らせるペンを止める事はない。

真面目だなあ、と素直に感心する。

同じ学校、同じ学年、同じ教室にいるのだから、自分もああするべきだと常々思っているのだが、だからといってそれを実践するのは中々に難しい。中学生になったばかりの頃に、得意な科目はこれから見つけると言っていた気もするが、それも怪しいままいつの間にか三年生になってしまった。

どうしたものかと考えて、マトはもう一度窓の外を見た。

空は変わらず真っ青で、変わらず平面的で、変わらず作り物のようなままで。

彼女はこんな空を見たことがあるのかな、と今もここではないどこかにいるであろう少女の

事を考えて、マトは小さく溜息を漏らした。



「で？」

四時限目の終わりを告げるチャイムが鳴ると、どこにそんな気力が残っていたのか、文字通り生き返るように生徒達が色めき立った。

それをもう少し授業の方にも回せないのかと、呆れ顔をした先生が授業の終わりを告げる号令もそこそこに教室を出て行くと、途端に昼休みの喧騒が広まっていく。

「テストの答えでも見えた？」

教室のあちこちで、思い思いの席に集まったクラスメイトが弁当や購買で買ったパンを広げる中、同じようにマトの席へとやってきた神足ユウが、からかうように言いながら、空いていた一つ前の椅子に腰を下ろす。教室の反対側、丁度購買から戻ってきたのだろう席の主にユウが「借りるよ」と手を振ると、快い返事が飛んできた。

「それが見えたら苦労しないよ……」

鞆かばんから取り出したお弁当を広げながら、マトが項垂れるついでに「あう」と小さく唸る。どうやら先程の様子をヨミだけではなくユウにも見られていたようで、同じように心配して

くれたのだろう。それは凄く嬉しいし、とても有り難い事なのだけれど、敢えて目を逸らしていた期末テストという現実を思い出させてくれたのは、からかうにしてはあまりにひどい仕打ちだと思う。

「テスト……うう、ヨミい……」

「継るような目でマトの席へと椅子を向けたヨミを見ると、少し困ったように、もう少し呆れたように、でもそれ以上に嬉しそうに微笑んで、

「自分でやらないとダメだって、いつも言ってるじゃない」

「ヨミ先生、そこをなんとかっ」

「——しようがないなあ、マトは」

「そうやってすぐヨミが甘やかすから、ますますマトがダメになるんだよ」

ヨミの返事に目を輝かせたのも束の間、右手の箸を振りながら、抗議するようなユウの言葉に、マトは上げた頭を再度項垂れさせた。

「ダメについて、私そこまでひどくないよ……」

「中間テストの結果は嘘を吐かないのです」

「いや、あれはね？ ほら今年はずつごく暖かい日が続いてたし？ 勉強しようとしても、こ
う、気が付いたらとうとうとー……っ」

なんとか弁明を試みるも、蔑むように目を細めたユウの視線を受けて、次第にマトの声が

弱々しくなっていく。

「私も別にそんなつもりじゃないんだけど……まあユウの言う事も尤もだし、じゃあマト、今回は一人で頑張つて？」

「そんな、ヨミまで……」

更に追いつき打ちをかけるようなヨミの言葉に心底堪えたのか、開いたお弁当箱の蓋を持つたまま、マトががっくりと肩を落とした。

そんなマトを見て声を上げて笑う二人も、別に本気ではないのだろう。

いつもの三人。いつもの光景。

けれどそれが凄く大事な、大切な時間である事を、マトはよく知っている。

一年前、ちよつとしたすれ違いから起こった小さな事件。

ヨミの失踪と、そして何よりも「彼女」と出会った、去年の春先の出来事。

様々な要因が絡み合っていたそれは、それでも自分にこそ原因があったのだと、後になってマトは強く思った。

最初から解つていれば、最初から気をつけていれば、あるいは何も起こらなかつたのかもしれない。とはいえ全ては後の祭り。悔やんだところでどうする事も出来ず、だからこそ二度とあんな事が起こらないようにと今も想っている。

何もそれはヨミの事件だけを受けての事ではなくて、今こうして一緒にいるユウの身に起き

た出来事もまた、マトの想いを一層強くしていると言えた。

後になって本人から話を聞いただけで、ユウの方に関してはマトが直接何かをしたという事はなく、また「彼女」も関わってはいないらしい。

それはユウが自ら一步を踏み出したからであり、マトに気付かせてくれたからであり、色々な事に気付けなかったヨミの件と、色々な事を気付かせてくれたユウの件。二人がいてくれたからこそ、マトも一つ前に進めたような、そんな気がするのだ。

そんな大切な二人だから、そんな大切に想ってくれる二人だから、余計にマトは二人とも悲しませたくない、そう思う。

「まあでも、今回の期末テストは我々がバスケット部の夏期大会が掛かっていると言ってもいいからね。今回くらいは特別に家庭教師を許可しよう」

おどけた調子で言うユウに、ヨミが「なにそれ」と笑って応える。

「今回赤点取ったりしたら、補習の日が初戦と被るんだよ……」

マトの言葉に、ユウがうんうんと頷く。

「今年は二回戦からだから被るのは一日だけで済んだけど、今やマトも正真正銘、うちのエースだからね。いるといたくないのでは、戦力に雲泥の差があるという訳だよ」

「エースかどうかはともかくとしても、折角の試合に出られないのは嫌だし……」

変わらず項垂れたままの頭をヨミに撫でられて、マトがくすぐったそうに目を細める。

マトのいるバスケットボール部は、何も全国大会の常連だとか、そこまでの規模ではない。それでも、数年前からは県下で常に上位に入るくらいの成績を収めている。

ここ二年は後一步のところでは悔しい思いをしているが、マトがいなければもっと早く負けていただろうとは部内でもよく言われている。それに、聞いた話では密かに今年の県大会では優勝候補に数えられているのだとか。マトとしては、エースとして扱われるのは恥ずかしいやら何やらで常々止めてほしいと周りに言っているのだけれど、部のマネージャーでもあるユウが唯し立てる所為もあつてか、その望みは叶いそうもないまま、いよいよ最後の大会になってしまった。

「今年で最後か……マトの活躍、もっと見たかったなあ」

「その言い方、なんか補習受けるのがもう決まってるみたいなんですけど」

ジト目で見ると、ヨミはさつきユウに向けたのと同じように「そんなんじゃないってば」と微笑んだ。

「普段からしつかりしてないからだだよおー？ マトってば勉強となるとすぐ後回しにするんだから」

卵焼きを摘みながら言うユウに、今度はヨミが同調したように頷く。

「マトはちゃんとやれば出来るんだから、勿体ないよ」

「うう、二人がいじめるよ……」

そうは言いながらも、いつまでも項垂うなだれている訳にもいかず、いい加減持ったままだった蓋ふたを置いて、いただきます、と手を合わせる。

それから暫くは、他愛無い時間だった。

いつものようにおかずを交換したり、帰りにどこかへ寄ろうかと話したり。

あるいはそれは二人の気遣いだったのか、それとも聞きあぐねていただけなのか。

三人の弁当箱の中身が大体空になってきたところで、いよいよ先に口を開いたのは、ヨミの方だった。

「それで、期末テストでも部活の事でもなかったら、どうしたの？」

「へ？」

一瞬何を聞かれているのかが理解出来なかったが、すぐに思い当たったのか、マトが言葉を濁すように「あー」と間延びした声を上げた。

「まあ、大した事じゃないんだけどね」

「その割には結構な割合で呆ほうけていたように見えたけど」

「……そんなに？」

逆に尋ねると、二人が揃そろって首を縦に振る。敵わないなあ、と苦笑いを浮かべるのが精一杯だった。

「またあの夢？」

「あー、……うん」

マトが頷くと、やつぱりか、というような反応が返ってくる。

去年の春先に「彼女」と出逢ってから、マトは時折夢を見るようになった。

荒廃した世界。何もない世界。全てが終わった後の世界。

夢はいつもそんな世界のどこからか始まって、マトは一人彷徨い歩く。何処へ行けばいいのかも解らないまま、それでもいつも「彼女」の背中を見つけて、けれどそこで決まって目が覚めた。

ずっとそんな繰り返し。

ただの夢だと言われればそうかもしれない。それでもマトは、いつも見るその世界がただの夢であるとはどうしても思えなかった。

荒野を踏みしめる感触。掠れた空気。暖かさも冷たさも感じさせない乾いた風の音。

目が覚めた時にはやつぱりいくらか曖昧になってしまふけれど、それでも普通の夢とは比べものにならないほど、夢の中でも目覚めた後でも、自分の感覚ははっきりとしている。

「何か夢の中で変化があったとか？」

ユウの言葉に、マトが曖昧に首を傾げる。

二人にこの夢の話をしたのは、ちょうど去年の今と同じような時期。マトとヨミとユウ。三人の間で起きた小さな、けれど自分たちにとってはとても大きな事件が一段落した頃だった。

ろうか。

最初はマトも言うべきか言わざるべきか悩んでいた。

正に夢のような話であるその内容を聞いたところで、それが現実だと言われても普通であれば一笑されて終わってもおかしくない。けれどヨミとユウの二人は、今日と同じようにマトの変化に気付き、声を掛け、話を聞いてくれた。

最初はからかうつもりだったらしい二人は、それでもマトの話が「彼女」に及ぶとそれまでとは一変して真剣に耳を傾けてくれた。当事者であるところのヨミと、直接の関わりはなかったとはいえ、自身も似たような体験をしたユウにとって、マトの話がただの夢物語ではない事をどこかで感じていたのかもしれない。

とはいえ、それから何かが起こる事もなく、夢の内容も今までに変化らしい変化は見られな
いまま。

ただあるとすれば、それは夢そのものではなくて、ずっと彼女を見続けてきた自分の方なの
かもしれないと、マトは思う。

ここではないどこか遠い別の世界で、いつも一人で佇む少女。

彷徨い歩いた先で、まるでマトの事を待っていたかのように姿を現す彼女は、けれどいつも
後ろ姿ばかりで、時折見える横顔も、その世界と同じような無感情だった。

それでも、何度となく出会ったその後ろ姿を見ていると、マトにはなんとなく彼女がどんな

顔をしているか、何を思っているかが解るような気がしたのだ。

「よく解らないんだけどね、なんかこう、寂しそうだなー、って」

「そりゃまあ、何もない世界、だっけ？ そんな所にずっと一人でいれば、寂しさの一つも感じそうなものだけだ」

いやむしろ飽きるかな、と言うユウの言葉に納得しきれないのか、最後に残しておいた卵焼きを口の中に放り込んだマトが、腕を組んで小さく唸った。

「それはそうなんだけど……うーん、難しいなあ……」

「あんまり気負いすぎてもいい事ないよ。ほら食べ終わったら片付ける」

見れば、いつの間にかヨミもユウも片付けを終えていた。昼休みはまだ半分程度残っているが、教室の中でまだ弁当箱を広げているのはマト一人。慌ててぱたぱたと包んでいくと、ヨミ

「何かあったらいつでも言ってみてね」

「ん、ありがとヨミ」

「私だっているからねー」

「解ってるって」